（本冊）内容見本

12 「安楽」への全体主義

藤田省三

/50

検印

◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

抑制のかけらも無い現在の「高度技術社会」を支えている精神的基礎は何であろうか。言い換えれば、停どまる所を知らないままに、ますます「高度化」する技術の開発を更にウナガシ、そこから産まれる広大な設備体系や完結的装置や最新製品を、その底に隠されている被害を顧みることもなく、進んで受け容れていく生活態度は、一体どのような心の動きから発しているのであろうか。「追いつき追い越せ。」から「ますます追い越せ。」へと続いて来ている国際競争心等々のほかに、少なくとも見落としてはならない一つの共通動機がそれらの態度の基底にあって働き続けている。

それは、私たちに少しでも不愉快な感情を起こさせたり苦痛の感覚を与えたりするものはすべて一掃してしまいたいとする絶えざる心の動きである。苦痛を避けて不愉快を回避しようとする自然な態度の事を指して言っているのではない。むしろ逆に、不快を避ける行動を必要としないで済むように、反応としての不快を呼び起こす元の物（刺激）そのものを除去してしまいたいという動機のことを言っているのである。苦痛や不愉快を避ける自然な態度は、その場合その場合の具体的な不快に対応した一人一人の判断と工夫と動作を引き起こす。通常の意味での回避を拒否して我慢を通すことさえもまた不快感を避ける一つの方法である。そうして、どういう避け方が当面の苦痛や不愉快に対して最も望ましいかは、当面の不快がどういう性質のものであるかについての、その人その人の判断と、その人自身が自分の望ましい生き方について抱いている期待と、その上に立った工夫（作戦）の力と行動の能力によって初めて決まって来るものである。そこには、個別的具体的な状況における個別具体的な生き物の識別力と生活原則と智慧と行動とが具体的な個別性をもって寄り集まっている。すなわちそこには、事態との相互的交渉を意味する経験が存在する。

それに対して、不快の源そのものの一斉全面除去（根こぎ）を願う心の動きは、一つ一つ相貌と程度を異にする個別的な苦痛や不愉快に対してその場合その場合に応じてしっかりと対決しようとするのではなくて、逆にその対面の機会そのものを無くしてしまおうとするものである。そのためにこそ、不快という生物的反応を喚び起こす元の物そのものを全て一掃しようとする。そこには、不愉快な事態との相互交渉が無いばかりか、そういう事態と関係のある物や自然現象を根こそぎ消滅させたいという欲求がある。恐るべき身勝手な野蛮と言わねばならないであろう。

かつての軍国主義は異なった文化社会の人々を一掃殲滅することに何の躊躇も示さなかった。そして高度成長を遂げ終えた今日の私

語注

〈語注〉＊第一義　最も重要な根本的な意義。　＊ニヒリズム　虚無主義。既存の社会秩序や権威などを否定する立場。　＊大物主の神　日本神話に登場する神。奈良県桜井市大神神社の祭神。　＊en-joy　喜ぶ。enは「～する」の意の接頭語。joyは「喜び」の意の名詞。「喜び」(joy)に積極的にかかわる(en)ことを表すため、ハイフンでつないでつづられている。

問一　二重傍線a「ウナガシ」、b「コウマン」、c「コウケン」を漢字または漢字と送り仮名で、d「未曾有」の読みを平仮名で記しなさい。（1点×4）

a〔　　〕b〔　　〕c〔　　〕d〔　　〕

問二　傍線①「不快を呼び起こす元の物（刺激）そのものを除去してしまいたい」とあるが、これをすることによって何が失われるのか。それを説明した次の文の空欄に入る九字の言葉を本文中から抜き出しなさい。（6点）

▼当面の苦痛や不愉快な［　　］が失われてしまう。

問三　傍線②「それ」の内容として適当なものを次から一つ選びなさい。（4点）

ア　生物的反応を喚起する根源を捨て去ろうとする心の働き。
イ　抑制のかけらも失ってしまった安楽への隷属状態。
ウ　不愉快な事態との相互干渉を回避しようとする自然な態度。
エ　苦痛を避けて不愉快を回避しようとする自然な態度。
オ　個別的具体的状況下にある私的安楽主義を否定する心の働き。

問四　傍線③「括弧つきのただただ一面的な『安楽』」とあるが、「括弧」のつかない「安楽」とはどのようなものか、三〇字以内でまとめなさい。（8点）

問五　二か所の空欄Xには同じ語が入る。適当な語を次から一つ選びなさい。（4点）

ア　だから　イ　しかも　ウ　しかし　エ　むろん

問六　傍線④「逆説」の説明として適当なものを次から一つ選びなさい。（4点）

ア　「安楽」を得られれば他の全ての価値を支配できるはずなのに、逆にますます不安になること。
イ　「安楽」追求により自分が自由になると同時に、他人の自発性をも妨げる結果になること。
ウ　不愉快の根源をすべて除去したいという願望に基づいた「安楽」追求の姿勢自体に安楽はないということ。
エ　安らぎと不安とは本来対立概念であるのに、「安楽」追求により、同列のものとなってしまうということ。

問七　空欄Yに入る適当な語を次から一つ選びなさい。（4点）

ア　交換価値　イ　使用価値　ウ　価値判断　エ　経験的価値

問八　空欄Zに入る一〇字以内の語句を本文中から抜き出しなさい。（6点）

問九　本文の内容に、合致するものをア、合致しないものをイで答えなさい。（2点×5）

A　高度技術社会での生活態度の基底にある共通動機は、少しでも不愉快な感情を起こさせたり、苦痛の感覚を与えたりするものを全て一掃してしまおうとする心の動きである。
B　不愉快な事態との相互交渉をせず、その事態に関係のある物や自然現象を根こそぎ消滅させたいとする欲求は身勝手で野蛮である。
C　「安楽への隷属」による精神的な損失は、一定の不快・苦痛の試練を潜りぬけたときに得られる成就の「喜び」の消滅である。
D　ただ一つの効用のためだけに使われる場合の物は、次々と使い捨てていく「享受」の楽しみという包含性を欠いている。
E　成就の「喜び」のなかに「享受」の楽しみを積極的に見出だしていく意識的努力をしていくことがニヒリズム克服の手がかりとなる。

（別冊）内容見本

12 「安楽」への全体主義

藤田省三

本冊 P.48

【筆者】
藤田省三　一九二七―二〇〇三年。政治学者・思想史家。愛媛県生まれ。現代日本社会の精神的欠落を鋭くえぐった。

【出典】
本文は一九八二年頃に書かれたもので、『全体主義の時代経験』（みすず書房一九九六年）によった。

【主な著書】
『維新の精神』（みすず書房）、『精神史的考察』（平凡社ライブラリー）など。

【本文解説】
▼「『安楽への隷属状態』」「『能動的ニヒリズム』」「成就の『喜び』」「『享受』」の楽しみ」などをキーワードにして、現代社会の状況について論じた文章。

現代社会では、不快のない状態としての「安楽」を優先的価値として追求する。そして「安楽への隷属状態」が現れて来る。「安楽」への狂おしい追求と「安楽」喪失への不安が心中を満たすのだ。これは「能動的ニヒリズム」と呼べる。これにより、試練を潜り抜けたことによる「喜び」という感情が消滅し、苦しみとも喜びとも結合しない「享受」の楽しみがもたらされるのだ。

二十世紀前半は全体主義の時代であった。強大な政治権力によって人々を支配し、思想信条を共にする「敵」を殲滅する支配体制である。そのような政治体制に見られるさまざまな機構や思考習慣の特色は、第二次大戦によってファシズム国家が崩壊し、産主義独裁国家が変質したことで、もはや過去のものとなったといえるか。

藤田省三は、そうではないという。いま、あらたな全体主義が「生活様式における全体主義」高度に発達した資本主義特有の生活と精神のあり方として、猛威を振るのである。それは「安楽」を目的に、一切の不快を殲滅しようとするニヒリズム」であって、その行き着くところ、強大にそびえ立つ現代の社会機構のもとで、人間の精神は解体状態にあるというのだ。一面的な見方だろうか。日々の私たちの生活の実態を注意深く反省してみるならば、こうした筆者の診断が、容易に否定しがたい現実性を持っていることが分かるだろう。

私たちは、困難を避けていかに楽に生活できるかを、生活の根本的動機としていないか。めまぐるしく更新される新製品の消費におぼれていないだろうか。快適な消費を可能とするために、金銭的価値が人生上の諸価値の中心にすわっていないか。いまの現実を超える世界を望み見る視力を失ってはいないだろうか。藤田省三のこの文章は、現代社会のなまなましい診断である。

【要旨】（二〇〇字）
現代の高度技術社会を支える精神的基盤は、不快や困難を引き起こす物や事態を一掃し、殲滅しようとする、「安楽」への欲求である。「安楽」を中心的価値として他の全ての価値を従属させた結果、「安楽」を求め、それ以外の全ての価値や経験を解体する新種の「能動的ニヒリズム」が現代人を支配している。困難や不快を感じさせる事態や物との交渉である経験がなくなり、経験の克服から生じる「喜び」という感情も消滅し始めたのだ。

【解答と解説】
問一　a＝促し　b＝高慢　c＝貢献　d＝みぞう
解説　b＝「高慢」は「思い上がって人をあなどること」の意。d＝「未曾有」は「今まで一度もなかったこと」の意。

問二　事態との相互的交渉
解説　まず、傍線部を含む文の頭の「むしろ逆に」をおさえる。「むしろ逆に」の前の「苦痛を避けて不愉快を回避しようとする自然な態度」と、「反応としての不快を呼び起こす元の物（刺激）そのものを除去してしまいたい」という動機」対比になっていることが分かるはず。さらに、傍線部の次の

別読本『ちくま評論選 改訂版』収録と同一本文使用

別冊【解答・解説】32頁内容

■筆者紹介
■出典
■主な著書
■本文解説
■要旨（200字）

■丁寧な解説付きの解答
読解上の疑問点などをわかりやすく解説。
自学自習用にも対応できます。